

岐阜県立関高等学校地域研究部報告

第9号

特集：「東美濃三力所城」を歩く

～津保城と斎藤新五を中心に～

- ・「東美濃三力所城」をめぐる ～山城と古文書から考える中濃の戦国史～
森 翔吾 神山 諒成 佐藤 孝亮 渡辺 俊太 岩原 知哉 土本 徳哉
..... 2
- ・加治田の領域と街道
富加町教育委員会 文化財専門官 島田崇正
..... 13
- ・関市大洞城の構造にかかる若干の考察
関市文化財保護センター 森島一貴
..... 18
- ・斎藤新五利治発給文書などからみた加治田領支配（その1）
富加町役場企画課 山内 正明
..... 22
- ・津保城に関するメモ、5題
関高等学校 地域研究部顧問 林 直樹
..... 27
- ・後 記

2024年4月10日

ひがしみのさんかしよのしろ
「東美濃三カ所城」をめぐるって

～山城と古文書から考える中濃の戦国史～

岐阜県立関高等学校地域研究部

森 翔吾 神山 諒成 佐藤 孝亮 渡辺 俊太 岩原 知哉 土本 徳哉



大洞城石垣の測量調査（2023.8）

目次

はじめに ～浅井長政書状と「東美濃三カ所城」～

第一章 山城をめぐる問題

第一節 加治田城（7月2日）

第二節 大洞城（8月18日）

第三節 鉾尾山城（8月3日）

第二章 古文書を読み解く

第一節 第1回古文書セミナー（8月5日）

第二節 第2回古文書セミナー（8月12日）

おわりに ～「東美濃三カ所城」の役割の変化～

はじめに ～浅井長政書状と「東美濃三カ所城」～

織田信長の東美濃征服作戦や(注1)、信長の馬廻衆であった斎藤新五利治(加治田城第2代城主、以下新五と略)を研究してきた我々地域研究部は(注2)、今年度、同じく信長の馬廻衆を務めた佐藤六左衛門秀方(鉾尾山城第2代城主、以下六左衛門と略)についての調査を行うことにした。新五と六左衛門は、領地の境を接する領主同士であり、馬廻衆として同じ戦場に立つこともあった(注3)。

両者の間に、ほかにも何か接点がないか調べてみると、富山県勝興寺のウェブサイトにも、興味深い史料が掲載されていることを知った(注4)。元亀4(1573)年2月、浅井長政から勝興寺に宛てられた「越中勝興寺宛浅井長政書状」である。この書状には「東美濃加治田・つば・奈多尾三カ所城、兼て信玄え申し合わせるに」とある。「加治田」は富加町の加治田城、「奈多尾」は美濃市の「鉾尾山城」を指す。「つば」は関市津保川上流域を指す地名であり、この地域で中世山城と言え、関市富之保に所在する大洞城をおいてほかにはない。永禄8年(1565)年以降、津保が新五の統治下にあったことは、「斎藤新五宛織田信長知行宛行状」により判明している(注5)。「三カ所城」とは、城主である新五・六左衛門両名や家臣団を指していると考えられる。

長政の書状をそのまま読めば、「東美濃」の「加治田・つば・奈多尾」の「三カ所城」が、すでに武田信玄と内通していると解釈できるので、信長の馬廻衆にまで信玄の調略が及んでいたとする見解もあるが(注6)、実際はどうであったのか。

我々6名は美濃市出身であり、古城山の名で親しまれている地元の鉾尾山城が、浅井長政や武田信玄の書状に登場していたことを初めて知り、強い関心を抱くようになった。そしてこの夏、地元の文化財担当の方々の助言を受け、「三カ所城」を踏査し、関連する文献を読み、長政書状が書かれた歴史的背景を探ってみた。以下にその調査結果を記す。

第一章 山城をめぐる問題

書状に登場する加治田城・大洞城・鉾尾山城について、実際に現地を踏査し、さらに関連する文献を読み、それぞれの重要性について考えてみた。

第一節 加治田城(7月2日) 島田崇正さん(富加町教育員会)に案内をお願いし、加治田城及び城下町を踏査した。加治田城は富加町の調査により、その姿が次第に判明しつつある(注7)。山麓の公民館東側からまっすぐ登る登城道の入口が大手である。大手道に面する南東側の防御は堅固であり、何段もの曲輪群と複数の堅堀が設けられている。南東の防御施設を上がると、長辺1mほどの石材が積まれた虎口がある。虎口の石垣は、現在は一段のみが露呈しているが、複数段積み一部が土砂で埋没していると考えられる。我々は、寄せ手を誘い込んで攻撃を仕掛ける虎口の説明を聞き、その巧妙さに驚くとともに城づくりの合理性に納得した。山頂部の主郭周辺には腰曲輪や帯曲輪がめぐり、主郭南西面には石垣もみられる。主郭は25×15mの長方形を呈し、南西部がやや張り出して隅角部が造られている。

城下町の主要な遺構は失われているが、現在の公民館及び龍福寺山門前に、東西ふたつの領主館があったと推定されている(注8)。龍福寺参道は、山門手前100mほどが2～3・5mほど盛り上がり、本来、領主館西側土塁であったと考えられる(注9)。さらに西側に進むと、関勢と加治田勢が争った絹丸古戦場にいたる。江戸期の軍記には、この地に城

下町西辺の防御線（捨堀）があったと記されている（注10）。

加治田城は、信長の東美濃攻略の足掛かりとなった重要な城である。新五は、その後、越中攻略の任にあたって軍功を挙げた。岐阜城下から飛騨、越中方面に向かう街道沿いの要地加治田に、新五が拠点を構えた意義は大きい（注11）。その後、加治田城は本能寺の変後に森氏の侵攻を受け、斎藤利堯（加治田城代、新五の親族）によって一時はこれを退けたものの、やがて森氏の支配下に入り廃城とされた（注12）。

第二節 大洞城（8月18日） 森島一貴さん（関市文化課）の指導で、石垣の測量調査や遺構の現状確認を行った。古くから知られている城であるが学術調査は実施されていない（注13）。城は津保川・武儀倉川にはさまれた愛宕山に築かれ、山麓の南は飛騨西街道と郡上街道の追分に位置する。大手道から登ると、主郭近くの尾根の下に石垣の散乱が見られる。主郭南西側に構築された櫓台の西・東・南辺には、一辺約6m、高さ約1・5mほどの石垣がめぐっている。我々は、このうち南辺石垣の測量を行った。この櫓台の北東側には、麓まで続く深さ2m、幅4m程度（推定）の巨大な堅堀がある。堅堀を登り切った場所の近くに、大きな曲輪があったはずだが、林道工事で壊されたため確認できなかった。

櫓台から主郭の東側に向かって進むと、虎口がありその両側に高さ約2mの石垣がある。また、主郭と虎口を繋ぐ帯状の曲輪が西側ありそこにも石垣が確認できる。主郭の広さは東西約45m、南北約15mである。山頂の祠がある部分が一段高くなっており、ここに中心的な建物があったと考えられる。主郭下の曲輪あたりにも石垣の散乱が見られることから、主郭と直下の曲輪のまわりには、急斜面が形成されている北西側以外、すべて石垣がめぐっていたと考えられる。

主郭を囲む石垣が1カ所途切れている部分があった。森島さんによれば、主郭に登るための入口で、おそらく門があったのではないかとのことであった。ほかに入口らしきものは見当たらないので、ここに門があった可能性は高いが、敵兵が主郭近くまで押し寄せたらどうやって防衛したのか。疑問に思い、参加者一同で話し合ってみた。我々は、曲輪や主郭の現状のみを見て話を進めていたのだが、当然、遮蔽物としての木柵や板塀があったはずである。そのように想定すると、主郭をめざす寄せ手は必ず、狭い道と虎口を通過しなければならないので、攻め上ってきたら城側から一斉に攻撃を受けることになる。この城が、堅固な要塞として築かれていることがよく理解できた。

地誌や地元の伝承によれば、この城は、信長の命を受けた一柳直末が築城したことになる（注14）。前述の通り、永禄8（1565）年、信長は津保を新五に知行として与えているので（注15）、当初、大洞城の城主は直末ではなく新五であったと考えられる。天正16（1588）年以降、秀吉の名を受けた稲葉貞通が津保及び郡上を統治するが（注16）、新五の死によって斎藤家が衰退した天正11（1583）年から天正15（1587）年にかけての5年間に関しては不明である。確かな一次史料はないが、我々は、一柳氏の大洞城への関与を、この間のことではなかったかと想像する（注17）。

その後、関ヶ原の合戦を機に、稲葉氏が転封となり遠藤氏が郡上八幡に返り咲くと、大洞城は廃城とされた（注18）。

第三節 鉦尾山城（8月3日） この城も学術調査は行われていない。8月3日、『美濃市史』『東海の名城を歩く』を参考に、地域研究部独力で踏査を行った（注19）。城は標高437m

の山頂に築かれている。南北に尾根が延び東側と西側は急斜面となっているため、堀切や堅堀は見られない。自然地形を利用した防御性の高い山城であり、「三カ所城」の中では最も峻険で一番の要害に思えた。我々は踏査時に、南北にある三段の曲輪、北側の土塁、南側の石垣、そして4段に連なる帯曲輪を確認した。石垣の積み方は算木積に近く、大洞城とは異なる工法が用いられていた。南側には下の曲輪とつながる虎口があった。緩やかな南側斜面の防御性を高めていると考えられる。

清泰寺所蔵の『佐藤金森（清泰寺）由緒書』には、鉾尾山城が佐藤家三代の城であったことが記載されている(注20)。佐藤一門は稲葉山城主斎藤氏に仕えていたが、信長の東美濃征服を機に織田家に臣従する。二代目六左衛門は新五に同じく馬廻衆となり、長篠の合戦において、鳶の巣山砦の攻撃で武功をあげたことで知られる。本能寺の変後は、義兄弟の関係にあった金森長近と計らって秀吉に従い、斎藤家没落後、関を併せて支配する領主となった。ところが三代目城主、佐藤才次郎方政が関ヶ原の戦いで西軍についたため改易処分となり、佐藤家は三代で滅亡した。佐藤家旧領は縁戚にあたる金森長近の統治下に置かれた。金森氏はあらたに小倉山城を築き、鉾尾山城は廃城となった(注21)。

第二章 古文書を読み解く

加治田、大洞、鉾尾山の踏査を計画するかたわら、我々は、長政書状をはじめとする古文書を実際に読むことにし、山内正明氏（富加町教育委員会）に指導をお願いした。講読と言っても崩し字を読むのは難しく、翻刻文を読む作業を行った。中世文書の独特の文体や用語の解釈に苦労したが、当時の人々の心情に触れるようで楽しくもあった。

第一節 第1回古文書セミナー(8月5日) 第1回目セミナーでは「斎藤新五利治書状写」と今回のカギを握る「越中勝興寺宛浅井長政書状」を読み、我々の地元及びその周辺で起こった歴史的出来事や、この地域にゆかりの深い武将である新五についての理解を深めた。新五は、斎藤一門出身（道三末子説が有力）であるが、その前半生は詳らかでない。東美濃攻略後に加治田城主となり、信長・信忠父子の馬廻衆として畿内・北陸各地を転戦した(注22)。中でも天正6(1578)年の越中攻略戦での武功は甚だしく、信長父子から激賞されたが本能寺の変で討死を遂げた(注23)。今回のセミナーで扱った「斎藤新五利治書状写」は、新五が上杉謙信側近である河田長親へ宛てたもので、天正2(1574)年のものと考えられている(注24)。内容は、天正2年春に武田勢が東美濃の岩村城下へ進出したため、信長が救助に向かうが間に合わなかったこと、同じ頃越後では謙信が関東へ出陣し西上野の武田方の城を数カ所攻め落とし越後へ帰国したと聞いたこと、この書状を長親から謙信へ披露してほしいなどのことが書かれている。

天正2年は、謙信が信長へ不信感を抱き始め同盟関係が揺らいだ年である。文面からは、上杉への協力姿勢を懸命に示そうとしている新五の姿が浮かび上がってくる。これまでは武人としての新五が強調されがちであったが、この書状からは、対上杉外交を担っていた取次役としての新たな新五像が浮かび上がる。皮肉なことに、書状の宛主河田長親と新五は、のちに越中をめぐる攻防戦で対峙することとなる。

もうひとつの「越中勝興寺宛浅井長政書状」は、今回の研究のきっかけとなった書状である。謙信の越中侵攻が続く中、長政と勝興寺との間で交わされた往復書簡のひとつであり、勝興寺が信玄に相談なく上杉との和睦を企てていることを危惧し、近江及び遠江・三

河では信玄が優勢であることを理由に、和睦を思い止まらせようとの意図で書き送られたものである。仮に、越中一向一揆との和睦で余力を得た上杉が、背後から武田を突けば、目下進行中の信玄西上作戦が挫折しかねない。こうした事態を回避するため、長政は勝興寺に対し工作を仕掛けたと考えられる。文面に登場する「東美濃三カ所城」、すなわち新五と六左衛門の武田への内応を示唆する史料はないので、事実ではなく、勝興寺を説得するために長政が発した虚報と考えるべきである。

三方ヶ原の合戦が元亀3(1572)年12月22日。長政が書状を送った日付が元亀4(1573)年2月16日。信玄死没が同年4月12日。そして浅井家滅亡が同年9月1日。目まぐるしく変わる情勢の中、「東美濃三カ所城」がこの書状に登場する理由は何か。次回のセミナーまでの間、じっくり考えることにした。

第二節 第2回古文書セミナー（8月12日） 第2回セミナーでは「越陣宛武田信玄朱印状」を読んだ(注25)。この朱印状は、元亀2(1572)年、信玄が朝倉義景へ宛てたものである(元亀元年説もあり)。そこには「郡上の遠藤、岐阜へ向けなたをの取手早々これを築くべき旨、催促せしめ候、それよりも同前に仰せ越さるべきの事」とあり、郡上の遠藤に、岐阜へ向け「なたをの取手」を築くよう朝倉からも催促するようにと書かれている。

ここにいう遠藤とは、郡上八幡城主遠藤慶隆のことであり、信長に臣従しつつも信玄と内通する二重外交を展開していた人物である(注26)。郡上は一向一揆の牙城で、中でも安養寺は大きな影響力を持ち遠藤氏とも友好関係にあった。信長が本願寺と対立した時、本願寺との友好関係にあった信玄は、安養寺経由で遠藤調略をめざした(注27)。しかし、この時点では、武田・織田の同盟は続いていたので、遠藤は武田と内通しつつも織田に臣従するという両属状態を続けた。また、遠藤への調略は、武田だけが行っていたわけではなく、朝倉・浅井も同時に行っていたことが、「朝倉書状写」「浅井書状写」によって分かっている(注28)。「朝倉書状写」には、信玄の遠江・三河侵攻及び戦況を朝倉の家臣へ伝達した遠藤への感謝が書いてあり、「浅井書状写」には、浅井が甲斐へ使者を派遣する際、郡上を無事に通過できるよう遠藤が配慮したこと、長政から遠藤に対し、織田から武田へ鞍替えするように促すようなことも書いてあった。

このような事情を踏まえ、まず「郡上の遠藤、岐阜へ向けなたをの取手早々にこれを築くべき旨」の解釈をめぐって議論した。信玄が郡上の遠藤氏に対し信長を牽制するために、佐藤氏の鉦尾山城を乗っ取るよう命じたと解釈するべきであるが、「なたをの取手」が鉦尾山城そのものを指すのか。あるいは乗っ取りのための付城を意味するのか。我々の中でも意見が分かれた。そのほか、「遠藤を味方にすれば、浅井・朝倉・遠藤・武田で信長を包囲することが可能となる」「遠藤が武田に内応すれば、同じく武田の影響下に置かれている南飛騨と連なることになる」「鉦尾山から岐阜城までは道のりにして20数キロしかないので鉦尾山の戦略的価値は高い」といった意見が次々と出された。

今回の山城踏査とセミナーを通じ、我々の間で鉦尾山城の戦略的重要性を共有できた。

おわりに ～「東美濃三カ所城」の役割の変化～

永禄8(1565)年、信長の東美濃征服により、加茂郡加治田城に新五が配置され、武儀郡大洞(津保)城はその統治下に置かれた。さらにこれを機に、武儀郡上有知の鉦尾山城に拠った六左衛門は、稲葉山城の斎藤竜興と手を切り織田に従った。結果、稲葉山城は背

後に敵を抱えることになった。当時、「三カ所城」という言葉がなかったとしても、稲葉山を脅かす軍事ブロックとしてこの時期に成立したものと考えたい。「三カ所城」はいずれも長良川水系に属するので川舟を出せば稲葉山城下までまっしぐらである。竜興は脅威を感じたのではないだろうか。

永禄 10 (1567) 年、稲葉山城落城にともない、それまで稲葉山を取り囲んでいた「三カ所城」は、織田領国中枢を守るための役割を担うようになった。「三カ所城」はいずれも交通の要衝に位置する。鉦尾山城は郡上街道に、津保城は飛騨西街道と郡上街道の双方ににらみを効かす。加治田は飛騨東街道の要衝であり、飛騨西街道や関・岐阜方面にも通じる宿場町・商業地でもあった。どの城も堅固で実用一点張りでありながら寄せ手を威圧する外観も備えている。鉦尾山は急峻な地形であり、堅堀や堀切などの技巧は必要ない。大洞城は津保・武儀倉川を、加治田城は川浦・大洞川を総構えとして取り込んでいる。城ごとに異なる地理環境を巧みに生かし切る知恵には驚くばかりである(注29)。

「三カ所城」より北の郡上郡の遠藤氏や益田郡の三木氏は、織田に臣従しながらもその一方で武田と内通するという二重外交を展開した。周囲を敵に囲まれたこの時期の織田にとって、武田との同盟は必要不可欠であったため、武田が一定の影響を持つ緩衝地帯としての郡上・南飛騨は重要な役割を果たしていたに違いない。ところが織田・武田の関係が破綻すると事情は一変する。信玄西上作戦(1572~73)に合わせ、武田も浅井も、郡上や南飛騨の勢力の離反を促す。「三カ所城」の戦略的重要性を認識していた浅井は、城主たる織田家馬廻衆が離反したとの虚報まで流したが、功奏することなく滅亡した。

天正 3 (1575) 年、長篠の戦いで勝頼が破れると、郡上や飛騨は無論のこと、恵那郡方面での武田の影響力も後退した。これにより「三カ所城」の役割に再度転機が訪れる。新五が越中攻略の主将に任ぜられたため、加治田城や大洞城は濃尾の兵を集めて越中に攻め入る拠点となり、鉦尾山城の佐藤にも後詰の任が与えられた(注30)。「三カ所城」は守りの拠点から、北方に攻め入る中継点、兵站の要地へと役割を変えたと考えられる。

以上に見た通り、「三カ所城」は、「稲葉山を攻める城」から「北方をにらみ岐阜を守る城」へ、さらには「越中を攻める城」へと役割を転じていった。そして豊臣から徳川への政権移行にともない役割を終えすべて廃城となった。

新五と六左衛門は「三カ所城」を預かりつつ、その一方で、馬廻衆として各地を転戦しなければならなかった。主君の絶大な信頼を受けた重職とはいえ、知行地を石高に換算すると、六左衛門は1万4千石、新五は1万9千石程度に過ぎない(注31)。本能寺の変で斎藤家が没落した一方、佐藤家は豊臣政権下においても存続したが、関ヶ原の合戦で改易処分を受け滅亡した。両家ともに大名家としては存続し得なかった。

主家は滅び、城は廃されても城跡は残った。「三カ所城」のうち加治田と鉦尾山は古城山の名で今も親しまれ遊歩道も整備されている。古城の名は、美濃市の小中学校や高校の校歌にも登場する。大洞城は、地元では「一柳の殿様」伝説で親しまれ、今も一柳城と呼ばれている。主郭の櫓跡には祠が立ち、夏草の時期にも丁寧な下草刈りが行われている。

今回、「三カ所城」の成立から発展、そして廃城までの道のりを大まかにたどってみた。それぞれの城跡が今後も愛され続けることを願い、我々も一層研究活動に努めたい。

【図版1 加治田城踏査】



加治田城● 東西の領主居館● 国土地理院 GISmap より転載



虎口付近の遺構確認



主郭から岐阜城を確認



西側領主館の西辺土塁跡



絹丸古戦場の調査 右手後方に加治田城

【図版2 大洞城踏査】



大洞城 ● 領主館 ● 国土地理院 GISmap より転載



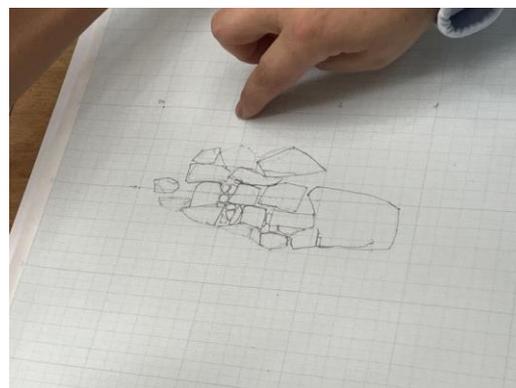
大洞城遠景（南から）



主郭付近の遺構確認



南西櫓台南辺石垣の測量



はじめての遺構実測図

図版 3 鉦尾山城踏査】



鉦尾山城 ● 旧城下町 ● 国土地理院 GISmap より転載



鉦尾山城遠景（西から）



南側石塁の現状

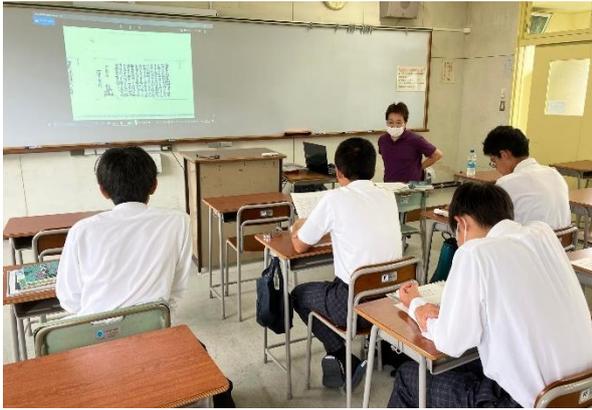


帯曲輪の遺存状況を上方より確認



主郭を踏査

【図版4 古文書セミナーの様子】



左写真は山内正明氏による古文書セミナーの様子。右写真は、セミナーを受講したのちの情報共有と議論の様子。

【注釈・引用文献】

- (注1) 『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第3号』2020.6
特集： 中濃の戦国史
『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第4号』2021.3
特集： 歴史遺産とまちづくり
- (注2) 『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第7号』2023.3
特集： 歴史漫画『斎藤新五利治』の誕生 ～地域と高校生の協働～
※本校地域研究部研究報告はウェブサイトでの閲覧可能
- (注3) 両名ともに『信長公記』に登場する。
- (注4) 高岡市雲龍山勝興寺／文化財デジタルアーカイブ
[\[#\]目録詳細 / 浅井長政書状 \(adeac.jp\)](#)
- (注5) 『富加町史 史料編』『富加町史 通史編』1980に掲載。
- (注6) 小笠原春香「武田・織田間の抗争と東美濃—元亀・天正年間を中心に—」『武田氏研究』53 2016
- (注7) 歴史資料集『織田信長の東美濃攻略を考える』富加町教育員会 2021 ほか
- (注8) 江戸期の古地図や『信長公記』の記載、遺跡の現況から、西館を佐藤忠能、東館を子息忠康（のち斎藤新五）の居館とみなす島田崇正氏の見解がある。
- (注9) 島田氏による見解。
- (注10) この合戦に関しては二次史料ではあるが『堂洞軍記』『南北山城軍記』に詳しい。近年では木下聡氏による一次史料を駆使した論証もある（木下聡著『斎藤氏四代』2020）
- (注11) 島田氏による見解。
- (注12) 関・加治田合戦後、加治田衆の多くは森氏に帰順し、加治田城も森氏の統治下に入ったが廃城とされた。
- (注13) 『富之保村誌』（1925）や『上之保村誌』（1986 復刻）、『武儀町史』（1992）に、江戸期の地誌や近隣の伝承に関する記載がある。城に関する記載のある江戸期の地誌としては、『新撰美濃志』『濃州徇行記』『濃陽志略』『美濃明細記』が挙げられる。最新の踏査録としては『東海の名城を歩く 岐阜編』（2019）掲載の森島一貴氏の報告が挙げられる。

(注 14) 一次史料はないが、江戸期の地誌や地元の伝承・地名に一柳氏築城説が残る。

(注 15) 前掲 (注 5) を参照。

(注 16) 『郡上八幡町史 上』 1960

(注 17) 新五の死後、斎藤家は、兼山・加治田合戦を経て急速に衰退し、加治田は森長可の支配下に置かれた。郡上の遠藤慶隆は、秀吉と反目した織田信孝と結んだため、秀吉の命を受けた佐藤秀方（六左衛門）や森長可の攻撃を受け、天正 11（1583）年に降伏した。秀吉は慶隆を転封処分とし、天正 16（1588）年、稲葉貞通が新たな郡上八幡城主となり武儀郡津保は稲葉領となる（『郡上八幡町史 上』 1960）。斎藤氏衰退（1583）から稲葉氏支配の開始（1588）までの約 5 年間、大洞城がどこの統治下に入ったのか不明である。大洞城に伝承を残す一柳直末は、秀吉側近であり美濃にも知行（大垣・輕海）を与えられ、蔵入地代官も務めていたといわれる。郡上の遠藤氏を牽制するため、秀吉が直末に大洞城を預からせた可能性がなかったか。今後も検討を続けていきたい。

(注 18) 前掲 (注 13) を参照。

(注 19) 『美濃市史 通史編』（1979）、及び前掲 (注 13) の『東海の名城を歩く』を参照にした。鉾尾山城の記載者は大洞城と同じく森島一貴氏である。

(注 20) 前掲 (注 19) 及び『美濃市史 史料編』 1979

(注 21) 前掲 (注 19)

(注 22) 『信長公記』に記載がある。

(注 23) 前掲 (注 5) を参照。

(注 24) 山内正明『郷土の偉人マンガ斎藤新五利治』（資料編） 2023

(注 25) 以下のウェブサイトのデータを利用した。

[\[#\]作品詳細 | 武田信玄朱印状 越陣（朝倉義景）宛（「芳墨拾遺」八卷所収） | イメージ](#)

[アーカイブ - DNP アートコミュニケーションズ \(dnpartcom.jp\)](#)

また前掲 (注 6) 論文、及び鴨川達夫「武田信玄の西上作戦を研究する」『東京大学史料編纂所紀要 25』（2015）を参照にした。不明な点に関しては山内正明氏の解説を受けた。

(注 26) 前掲 (注 25) の小笠原論文、鴨川論文を参照。

(注 27) 同上

(注 28) 同上

(注 29) いずれも山城も、河川や街道に面した交通の要衝に立地する。特に河川環境との関わりや川湊の推定に関し、地名や地形、古地図等を通じ検討する必要がある。

(注 30) 前掲 (注 5) を参照。信長父子は月岡野の戦いの戦勝後、六左衛門と森長可に後詰を命じた。

(注 31) 『美濃市史 通史編』掲載の「佐藤金森由緒書」（清泰寺蔵、江戸初期）には、貫高・石高の換算基準（錢 35 貫＝米百石）が示されており、六左衛門の知行（およそ 5 千貫）を 1 万 4 千石と見積もる。同様、新五の知行は、佐藤忠能からの相続分（4389 貫）及び信長からの新規宛行（6573 貫）を、同基準で見積もるとおよそ 1 万 9 千石弱となる。

【お世話になった方々】 島田崇正氏（富加町教育委員会） 森島一貴氏（関市文化課）
山内正明氏（富加町教育委員会） 半布里文化遺産活用協議会、関市文化財保護センター

加治田城の領域と街道

富加町教育委員会 文化財専門官 島田崇正

1. はじめに

加治田城は中濃地域における重要な拠点のひとつである。加治田城主が美濃斎藤氏と織田政権から与えられた所領の分布をみると、主に中濃盆地に分布しながらも飛騨川・津保川・川浦川流域を通る街道の要衝をおさえており、筆者は以前から広域流通路の掌握が加治田城の重要な役割と考えている(注1)。

本稿では加治田城主の領域内において、どのような広域交通路(街道)が想定できるのか、またその街道掌握の変遷過程を検討し、その拠点性の本質について考えてみたい。

2. 旅日記が記す飛騨街道経路

加治田を経由する飛騨との広域交通路はいわゆる「飛騨街道」であり古代には飛騨支路と呼称された経路である(注2)。この飛騨街道について飛騨金山以北は急峻な地形的制約により飛騨川沿いに限定され、振幅は少ないと考えられるため、本稿では飛騨金山までのルートを考えることとする。

検討の方法としては戦国期と江戸後期の旅日記類を参照し、それを明治44年(1911)大日本帝国陸地測量部測図(注3)に落とし込みながら経路の推定を試みた[図1]。幸い武儀・加茂郡は大半を山地が占めており、古くからの経路を想定しやすい利点がある。

『永禄六年北国下り遣足帳』

永禄6~7年(1563~4)にかけて醍醐寺の僧侶と思われる人物がつけた旅の支出簿である(注4)。北関東から東北南部にかけての勧進行脚ののち、帰路は北陸道から飛騨街道に入り美濃へ抜ける経路を選択し、湯ノ島(下呂市)・麻生(七宗町)・勝田(加治田)・井ノ口(岐阜市)で宿泊している(注5)。下呂から麻生に至っていることから飛騨川沿いを下ったことがわかる。麻生から加治田に至るルートはどこを経由したかが難しいが、上麻生で迂回したのであれば、納古山の北側を通る上麻生→神淵大塚→川浦→伊深のルート[図1①]が、下麻生からであれば川辺石神→神坂→地蔵峠→川浦[図1②]あるいは中川辺→鹿塩→三和[図1③]を経て加治田に至るルートが考えられる。距離から考えれば図1②③のルートが妥当ではある。

この史料によって戦国期に飛騨川沿いから長良川水系へ迂回するルートが存在し、木曾川流域の太田盆地や鶉沼などへ進まずに、加治田を経由して長良川水系へ接続していたことが分かる。おそらく関町も経由したであろう。この飛騨街道の利点は飛騨川水系と長良川水系をショートカットする点にある。そして信長が岐阜に居城した以降は、飛騨街道の重要性がさらに増したことが想像できる。

『文化元年飛田路記(蜚駄記)』

江戸時代に旗本加治田大嶋氏の地詰役人を務めた豪商、文之字屋平井家の十代当主である平井公寿が文化元年(1804)に赤田臥牛を訪ね飛騨高山まで旅したときの日記である(注6)。江戸後期の旅日記であるが、休憩地などを詳細に記録しており経路を知るうえで非常に参考になる。飛騨金山までの往路は加治田・上切・大洞・中廿屋・上廿屋・葛衣峠・間見・牛ヶ洞・大橋・大塚・下市場・朝張・杉洞・袋坂峠・前山・笹洞・桐洞・金山[図1④]

を、復路は金山・前山・杉洞・川浦・加治田[図1⑤]を経由している。また、往路の記述の中で「間見村ニイタル 川浦路ト合ス」とあることから図1⑤のルートは当時「川浦路」と呼称されていたことが知れる。

上記の2つの旅日記類より、加治田から飛騨金山へ至る経路は川浦川沿いと飛騨川沿いの大きく2つのルートが考えられる。さらに明治44年大日本帝国陸地測量部測図[図1]をみると津保川沿いに関から金山へ繋がる経路もみえてくる[図1⑥]。この経路は他の2つのルートと比較すると平坦であり飛騨街道の候補ルートにふさわしい。現在も「関・金山線」として利用される主要道路であるので、戦国期の経路の候補として検討を加えたい。

3. 加治田城主の所領からみたルート

次に上記の3つのルートをA・B・Cとし、所領分布から妥当性を考えてみる。

A：川浦路から麻生へ抜けて、飛騨川沿いを北上するルート

B：川浦川沿いを通り、間見・菅田を経て金山へ至るルート

C：津保川沿いを通り、下之保・上之保を経て金山へ至るルート

加治田城主である佐藤紀伊守（以下、佐藤とする）が弘治2年（1556）に斎藤義龍から与えられた所領(注7)と、その後に加治田城主となる斎藤新五利治（以下、新五とする）が永禄8年（1565）以降に織田信長（以下、信長とする）から与えられた所領(注8)を図1にプロットした。

興味深いことに佐藤の所領は旅日記から推定したA・Bの2つのルートに沿って展開していることが分かる。特に「掛深」「神淵」「桐原（菅田）」「金山」は川浦川沿いBルートの要所である。このことからA・Bルートとも戦国期まで遡る可能性があり、佐藤段階ですでに飛騨への交通の要衝であったことが推定できる。さらに付け加えて、加治田佐藤氏の経営基盤は太田盆地と周辺の農業生産地を抑えつつ川浦路の交通と飛騨川水運の掌握であった可能性を指摘しておきたい(注9)。

さて、所領分布をみる限り佐藤段階では川浦川沿いルートの要所はいくつか抑えているので街道交通に深く関与していると思われるが、飛騨川沿いは川湊「麻生」のみで津保川沿いは「神野」のみであり、主要経路の要所を完全に押さえているとは言い難い。おそらく佐藤段階では飛騨街道を掌握するまでには至っていないのではないかと。広域交通へ関与はしているだろうが、戦略的な掌握ではなく街道沿いを拠点とした領地経営の一環としての段階だろう。そしてこの課題が解消され街道筋の領有が大きく拡大されるのが佐藤の後継者となった新五の段階と捉えておきたい(注10)。そこには新五に知行地を与えた信長の戦略的な意図や、その後の新五の活躍の伏線を読み解くことができる。

新五の所領は東美濃攻略作戦への論功行賞として信長から与えられたもので、その前後に新五が加治田城主を継承しているため加治田への追加所領と捉えることもできる(注11)。知行地の分布をみると[図1]津保川沿いのCルート上に偏在している特徴を見出すことができ、新五の段階になって加治田が津保川沿いの街道筋を掌握するに至ったと整理できる。

さらに、飛騨川沿いでも街道要所である「坂のひがし」が新五の所領に加えられており、これによって加治田が主要街道A・B・Cの全てを抑えることができた。これはすなわち加治田が飛騨街道における美濃側の出入口をほぼ掌握したことになり、織田政権の戦略上での重要度が各段に増したのは想像に難くないだろう。

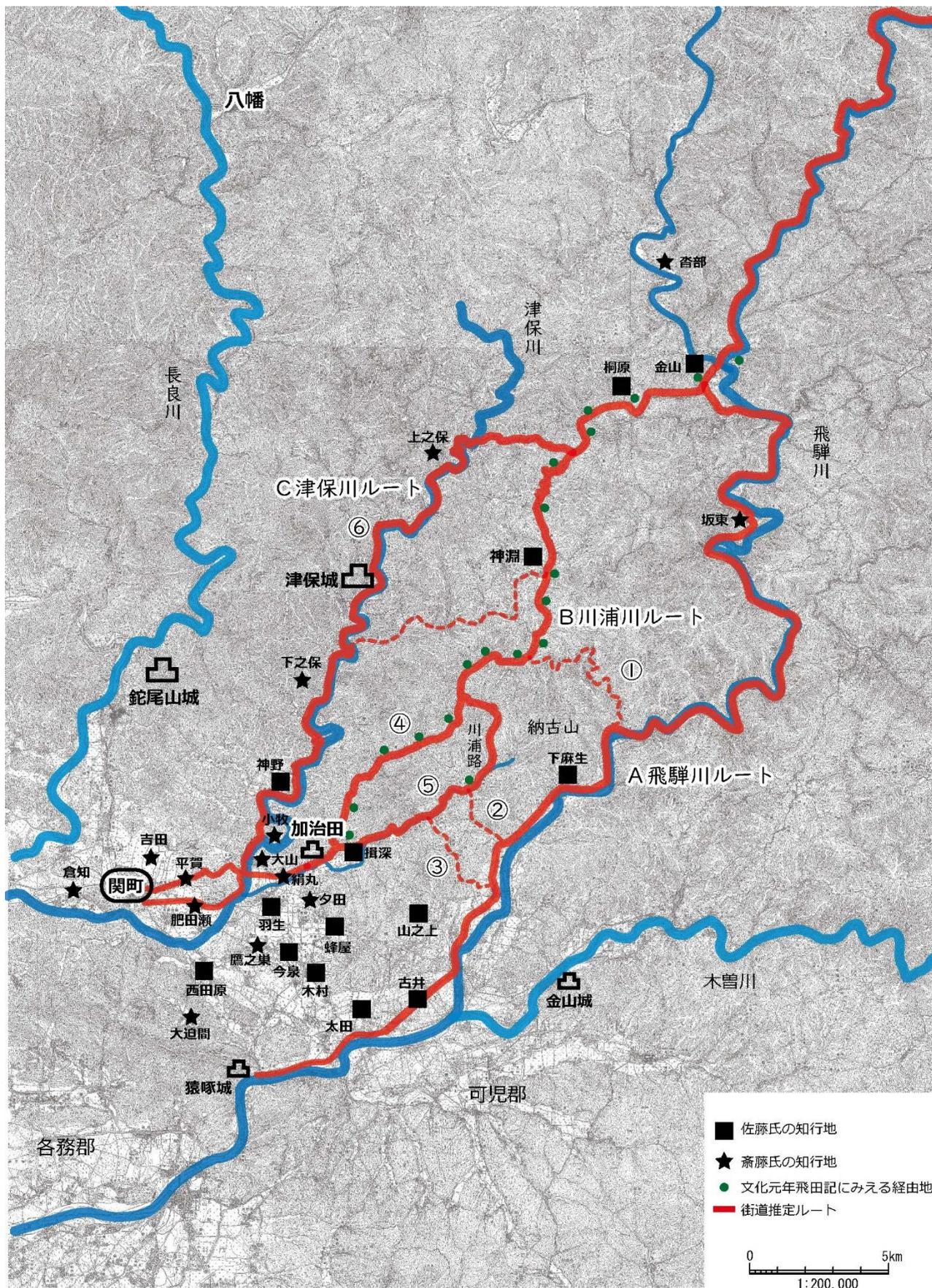


図1 加治田城領域での交通路想定図（下図は明治44年大日本帝国陸地測量部測図）

4. おわりに

中濃と飛騨金山を結ぶルートは複数あり、総称して飛騨街道（飛騨支路）と把握されてきた。今回特定したA～Cがその主要ルートと考えるが、今後は便宜的にAを飛騨街道の飛騨川ルート、Bを川浦川ルート、Cを津保川ルートと呼称して整理したい(注12)。

佐藤段階では川浦川ルートを掌握することで広域交通の一端を把握したに留まるが、新五の段階になって津保川ルートと飛騨川ルートの要所を領し、飛騨への経路を完全に掌握した。信長が新五に与えた知行からは、上記のような政策意図を読み取ることが可能である。そして新五はそれを整備し十分に活用した。天正6年(1578)の越中攻めである。飛騨経由で越中へ進出し(注13)、河田長親ら上杉勢を撃退する見事な活躍をみせ、信長・信忠父子に激賞された。この越中派兵を遂行するためには、事前に綿密な情報収集網や兵站の整備が必須である。これをなし得たのは飛騨街道を抑えた成果と考えられよう。そして、新五は越中攻めから遡ること4年前の天正2年(1574)段階ですでに上杉氏重臣の河田長親に対し織田方の取次役として諸々の交渉役を果たしていたことが指摘されており(注14)、交渉を任された新五にとって街道整備は早い段階で最重要の課題だったはずである。

元龜4年(1573)勝興寺宛浅井長政書状(勝興寺文書)において浅井長政が「加治田・つぼ・奈多尾三ヶ所城」(注15)を取り上げているが、津保(上之保、下之保)は新五が信長から与えられた知行地であり、新五が積極的に津保川ルートを整備した表れなのではないだろうか。津保川ルートは3つの街道ルートで唯一加治田を経由しない。つまり、このルートを抑えるための拠点として津保城を整備し利用する必要があったのかも知れない。そのための新たな街道整備拠点としたのではないだろうか。例えば小荷駄隊の進行など兵站を考えた場合に、3つのルートで最も通行が容易なのは津保川ルートである。越前・加賀からの北陸ルートが難航しつつあるなか、飛騨街道は越中・越後への重要な経路であり、最悪の展開も考えて軍事利用も視野に入れた整備に着手した可能性は高いのではないだろうか。

さらに、本研究報告にて関高校地域研究部が指摘するように(注16)、織田方でありながら武田や浅井と通じ二重外交を講じる郡上遠藤氏に睨みを効かせるうえで、津保城は格好の立地である(注17)。加治田城に課せられた織田政権の北方戦略を遂行する上で、津保城と津保川ルートの整備は新五にとって非常に重要な施策だったはずである。

以上、多分に想像を交え実証性に乏しい研究ノートであるが、街道の推定を通じて中濃の拠点である加治田城の戦略上の重要性や、織田政権での位置づけを考察した。今後はさらに詳細なルートや長良川水系への迂回ルートの検討を図りながら、戦国期中濃地域の特徴と動向について考えを深めていきたい。

最後に、関高校地域研究部との毎年の踏査は私にとって日々の思考の断片を整理する良い機会となっている。また彼らと一緒に山を登り、野を駆け、考えたい。

<注>

(1) 島田崇正 2021「加治田城とその城下町を考える」『織田信長の東美濃攻略を考える』美濃加茂市、坂祝町教育委員会、富加町教育委員会

(2) 野村忠夫 1971「古代の交通」『岐阜県史 通史編 古代』岐阜県

戦国期飛騨街道の原形は、『延喜式』に記載される東山道の方肩駅で分岐し加茂駅・武儀駅・下留駅・上留駅・石浦駅を経て飛騨国府に至る飛騨支路である。各駅の比定には諸説が有り経路の詳細は特定できていないが、武儀駅が設置されていることから津保川沿いか川浦川沿いの経路が考えられる。

- (3)大日本帝国陸地測量部測図五万分之一（複製版）の岐阜・太田・上有知・金山・下呂・八幡の一部を縮小・接合して図1の下図とした。

岐阜県郷土資料研究協議会 1998「大日本帝国陸地測量部測図五万分之一」複製

- (4)小島道裕 2004「中世後期の旅と消費『永禄六年北国下り遣足帳』の支出と場」国立歴史民俗博物館研究報告第113集

- (5)「六十文アソウハタコ 十八文昼休 廿二日 六十文ハタコ 濃州 勝田にて」前掲註4文献より

- (6)藤滝慎一 1998「蜚駟記」『岐阜県歴史資料館報第』第21集、岐阜県歴史資料館

地名の比定に関しては富加町古文書クラブの皆さんからご教示いただいた。記して感謝の意を表します。

- (7)「弘治二年(1556)斎藤義龍知行充行状写」（備藩国臣古証文）、「かち田年貢目録」（斎藤文書）

- (8)「織田信長知行充行状写」（備藩国臣古証文）

- (9)佐藤が所領し麻生には麻生湊がある。戦国期の様相は不明であるが、江戸期には飛騨川水運の要衝として網場が設置され木材流通の拠点であった。

木下尚年 1996「交通と水運」『川辺町史通史編』川辺町

- (10)この点に関して慎重に検討しなければいけない点がある。東美濃攻略戦後に信長が新五に与えた知行地の前任は誰だったかである。候補としては美濃方で排除された長井氏、多治見氏、あるいは鉦尾山佐藤氏、あるいは遠藤氏からの組み替えなどが考えられる。さらにひとつの可能性として、新五が加治田城主を継いでいることから佐藤紀伊守嫡男で戦死した右近右衛門の所領であった可能性も考えられる。その場合、街道掌握を佐藤段階に遡らせねばならなくなり、本論は成立しなくなる。

- (11)島田崇正 2023「斎藤新五利治への思索」『岐阜県立関高等学校地域研究部研究報告』第7号、関高校地域研究部

- (12)もちろん本稿は試論であり、無論ルートの詳細が確定したわけではない。さらに地名分布、伝承、古文書悉皆調査、寺院分布、地形踏査などを踏まえて再度検討する必要がある。

- (13)三好清超 2023「姉小路氏城館と越中西街道」『岐阜県立関高等学校地域研究部研究報告』第7号、関高校地域研究部

- (14)山内正明 2023「利治」書状にみる斎藤新五利治の人物像『美濃加茂市民ミュージアム紀要』第22集、美濃加茂市民ミュージアム

- (15)上杉謙信の越中侵攻への対応について、浅井長政が勝興寺に宛てた書簡であり、上杉との和睦を企てる勝興寺に対し、遠江・三河では信玄が優勢であり東美濃の加治田城、奈田尾城（鉦尾山城）、津保城も武田に内通しているとして、和睦を思い止まらせようとしている。読み下しについては次の文献を参考にした。竹間芳明 2015「戦国末期の郡上の検討ー武田氏、越前一機・本願寺政権との関わりを中心としてー」『若狭郷土研究 60巻1号』

- (16)森翔吾 神山諒成 佐藤孝亮 渡辺俊太 岩原知哉 土本徳哉 2024「東美濃三カ所城」をめぐって～山城と古文書から考える中濃の戦国史～』『岐阜県立関高等学校地域研究部研究報告』第9号、関高校地域研究部

- (17)森島一貴氏は、津保城の候補である大洞城の立地が飛騨西街道（津保街道）と郡上八幡への街道の結節点にあたることを指摘している。敢えてこの地に新五が整備の手を入れたとすれば、その理由は街道整備と遠藤氏への牽制を両立させる最適地であるからと考える。

森島一貴 2019「大洞城」『東海の名城を歩く岐阜編』吉川弘文館

関市大洞城の構造にかかる若干の考察

森島一貴（関市文化財保護センター）

1 はじめに ～大洞城の周辺環境～

大洞城は関市富之保に所在し、津保川と武儀倉川が合流する地点の北側にそびえる標高 260m の山頂に築かれている。関市内では石垣を最も多用している山城である。

山の西側には飛騨西街道（津保街道）が通り、山の東側に流れる武儀倉川に沿って上流に行くと郡上八幡へつながる。飛騨西街道と郡上八幡を結ぶ交通の結節点となっている。山頂からは曲折して流れる津保川、武儀倉川を望むことができ、街道筋の見通しのいい場所に立地している。また、津保川と武儀倉川は堀の役割を果たし、地形を活かした天然の要塞でもあったといえる。

2 城の構造

大洞城は山頂部と稲荷神社がある南東山麓の遺構群から成る。山頂部は約 150m 四方に遺構が広がる。山頂部の頂には広さ東西約 45m、南北約 15m の主郭がある。祠が祀られているところが 1 段、高くなっている。段の大きさは東西約 10m、南北約 8m で、主となる建物の基壇の名残であると推測される。

主郭の北側は急斜面で天然の要害となっている。東側には石垣をもつ虎口あり、南側にも石垣を確認することができる。西側の帯曲輪でも石材の散乱がみられることから、北側以外は石垣がめぐっていたものと考えられる。

虎口は通路が現状ではスロープ状になっている。通路の南・北側には約 2m の高さの石垣があり、ほぼ直角になるように積まれている。北側の石垣は西側に折れるが、隅は壊されているため、隅の石積の方法は不明である。

虎口から東へ行き、大きく回り込んで南西方向の通路へと繋が



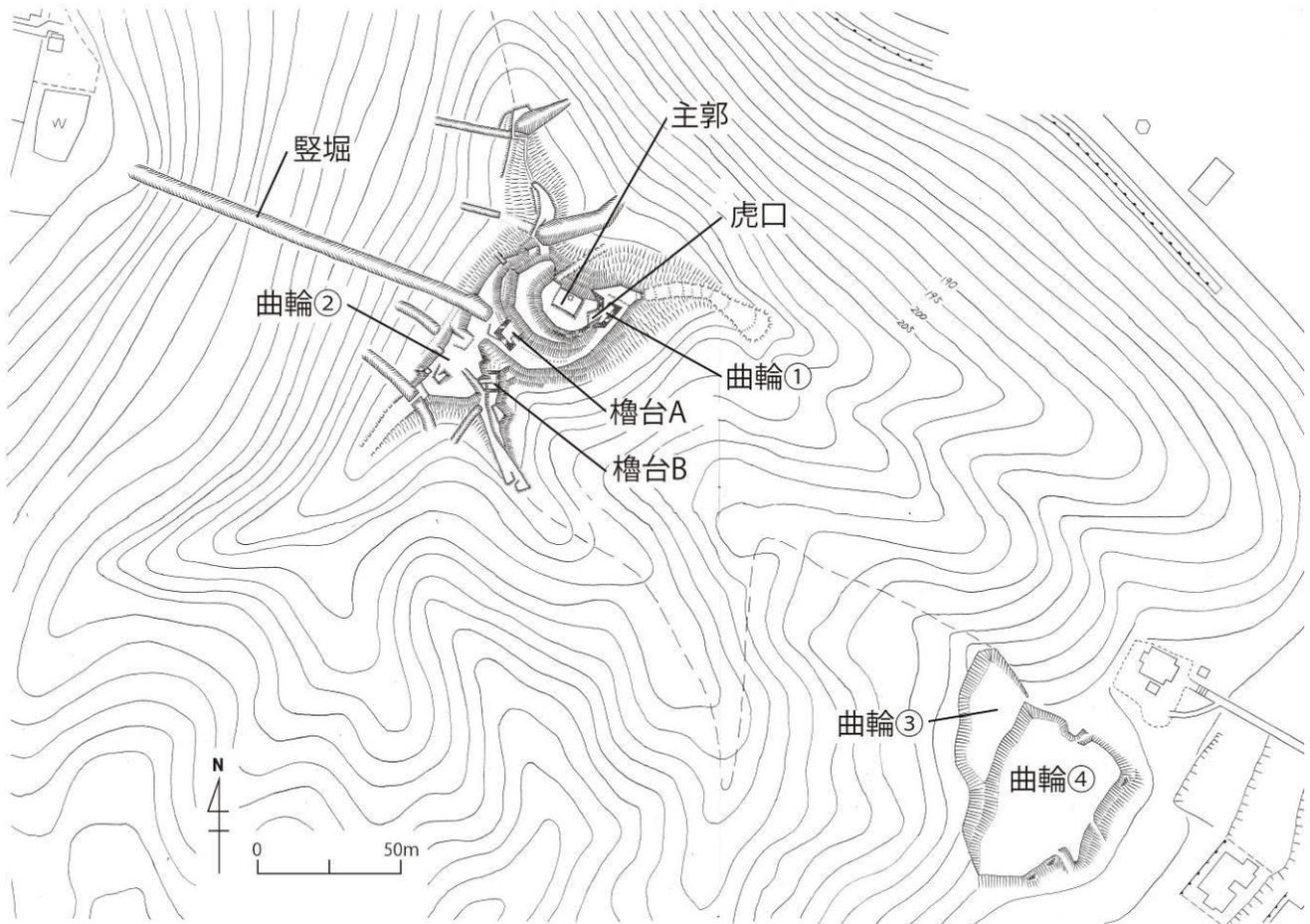
主郭の基壇（南東から）



虎口と曲輪①（東から）



主郭と曲輪①の石垣と通路（南から）



大洞城縄張図 (作図：佐伯哲也)

る。曲輪①の東側の石垣がみられる。

主郭の南側は斜面の上段のみ、腰巻状に石垣が巡っている。また、一部に巨石を使用している。いずれも地形に沿って石垣を築造しており、直線ではなく、弧状を呈し、高さは約2m程度となる。



櫓台Aの南西側の石垣(南から)

通路を進み主郭の南西側には櫓台Aがある。斜面地から「コ」状に張り出し、1辺が約6mを測

る。南東・南西・北西側の3方向に石垣がめぐり、石垣の高さは約1.5mとなる。南西側の石垣には他の2辺よりも巨石を用いて、鏡石のように使用している。また、櫓台Aの南東隅には高さ約1.3mの石を立てて使い、隅石としている。

櫓台Aの北西側には縦堀がある。麓まで延びる巨大な縦堀である。西側には他にも縦堀が築かれている。また、北側の緩斜面の尾根にも曲輪が築かれ、東側と西側へ延びる縦堀がある。

残念ながら曲輪②は林道の工事の際に改変を受けているが、曲輪②の東側には「コ」状に張り出す櫓台Bがあったようである。現在も周辺に石材が散乱しており、石垣を備えたものであったことがわかる。また、南西側の堀切は確認することができ、土橋状の痕跡

も見て取ることができる。

山麓の遺構についてもみておきたい。山麓の遺構は南東側、稻荷神社の南西側にある。2面の平坦面があり、上段の曲輪③は東西約180m、南北約300m、下段の曲輪④は東西約400m、南北約600mを測る。曲輪④の西側で石材の散乱がみられ、石垣があった可能性も考えられる。

3 城の特色

(1) 縄張

縄張の特色としては主郭の東側にある虎口と櫓台A、麓まで延びる堅堀、山麓の曲輪③・④などがあげられる。

虎口は平入りである。通路は現状ではスロープ状になっているが、階段であった可能性も考えられる。また、通路の南・北側には高さ約2mの石垣が設けられる。櫓台Aは3方向に石垣を巡らしている。現在は1か所しか確認できないが、もともとは曲輪②の東側にも櫓台Bあったことがわかっている。

西側には麓まで延びる巨大な堅堀があり、他にも3本の堅堀を配置している。西側は武儀倉川が流れ、郡上に抜けるルート側になる。郡上側を強く意識し、防御性を高めていたことが伺える。

山麓の曲輪には広い曲輪を2面(曲輪③・④)、確認することができる。山麓居館があった曲輪であると考えられる。よって、山頂部は詰め城であったと考えることができる。

(2) 石垣

主郭を中心に虎口、櫓台などに石垣を確認することができる。大洞城の石垣の特色は以下のようなものである。

- ・石垣はほぼ垂直となる
 - ・石垣は高いもので2m程度。これ以上の高さのものはみられない
 - ・現状では石垣周辺に礫の散乱はなく、裏込め礫などは確認できない。
 - ・櫓台・虎口は比較的、直線的に石垣を造っている。
 - ・主郭周辺の石垣は弧状を呈し、自然地形に制約を受けて造られている
 - ・主郭の南側は上段のみに石垣がめぐらされ、腰巻状となると考えられる
 - ・櫓台Aの南東隅には高さ約1.3mの石を立て、隅石とする
- このように直線的に石垣を積んでいるところは部分的にしかなく、基本は地形に制約を受け、弧状に石垣を積んでいる状況を見ることができる。また、高さは高くても2m程度で、高石垣はない。主郭の南側は腰巻状の石垣が巡り、このため、東側から主郭をみたときに2段に石垣を積んでいるように見える。石垣を高く積んでいるような視覚効果を狙ったのであろうか。



2段に見える石垣
(東から)

4 さいごに

大洞城の築造時期について若干の考察を加え、おわりにしたい。

内堀氏は大洞城の石垣についてはA類とし、在来系石垣と評価している（内堀 2021）。中井氏は櫓台Aの南東隅に巨石の隅石を使用することは岐阜城の一ノ門や大桑城の岩門のように巨石を使った虎口と同じ構造と評価し、大洞城の築造時期を土岐氏・斎藤道三段階のものとして評価している（註1）。石垣以外の要素で、虎口が平入りであること、山麓に居館があり、山頂は詰め城であることなどを考慮すると詳細な時期まで特定することは難しいが、内堀の時期区分のⅡ～Ⅲ期に該当すると考えておきたい（内堀 2021）。

また、壊されてしまっているため現状では確認することができないが、櫓台Bに関しては外柵形状になっていたようである（高田 2003）。改修があったことも考えておきたい。

今回は表面観察からわかる情報だけではあるが、大洞城について縄張りや築造時期について若干の考察をおこなってみた。正直なところ発掘調査を実施し、石垣の構造、出土遺物など考古学的事実に基づき検証していく手続きが必要である。今後、調査が行われ、大洞城の実態が明らかになることを期待したい。

【註】

- (1) 令和3年11月7日に中井均氏の講演会「関市の山城を探る」（関市わかくさ・プラザ学習情報館多目的ホール）における指摘による。

【参考文献】

内堀信雄 2003 「美濃地方戦国～近世初頭城郭石垣の変遷」『史跡加納城跡』岐阜市教育委員会

内堀信雄 2021 「美濃・飛騨地方の戦国期城郭石垣」『史跡岐阜城跡総合調査報告書Ⅰ』岐阜市教育委員会

高田徹 2003 「大洞城跡」『岐阜県中世城館総合調査報告書』2 岐阜県教育委員会

森島一貴 2019 「大洞城」『東海の名城を歩く』岐阜編 吉川弘文館

斎藤新五利治発給文書などからみた加治田領支配(その1)

富加町役場企画課 山内 正明

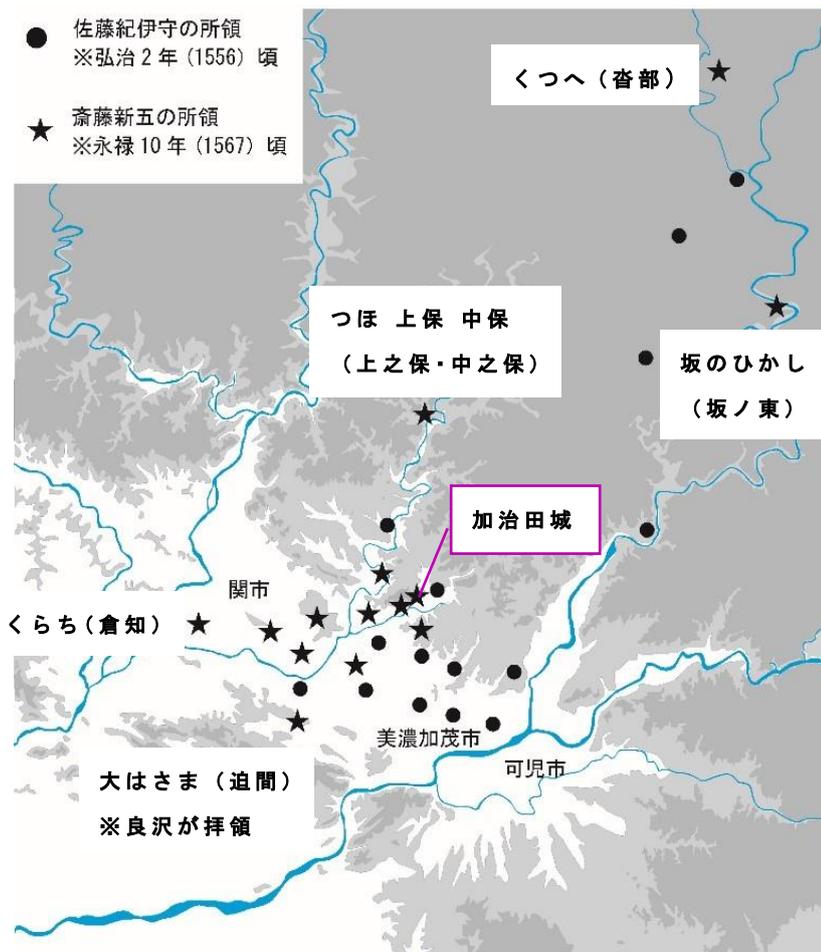
1. はじめに

斎藤新五利治（1552?～1582。以下、新五と表記）は美濃国の戦国大名斎藤道三の末子、あるいは甥などと伝わる戦国武将で、佐藤紀伊守忠能及び息子右近右衛門の後に加治田城主となった（永禄8（1565）年）11月1日付け「斎藤新五宛織田信長判物写」（1）。信長から与えられた領地は、本拠地「かちた」（加治田）のほか、武儀郡から加茂郡にかけての所領（15箇所、計2,184貫文）であり、これは現在の岐阜県加茂郡富加町・同郡白川町・関市・美濃加茂市・下呂市金山町にまたがる広大な面積である（図1を参照。以下、当該期の新五領を加治田領と表記）。

なお、筆者は令和元（2019）年夏から現在にかけて関高等学校地域研究部の活動に関わっており、先日は新五統治時代（1565.11頃～1582.6.2）の加治田領を車で巡るフィールドワークに同行した。車中及び現地では、「とにかく加治田領は広い。南部は平地が多いのに対し、北中部は山間部に囲まれた飛騨川沿いの地域。」という印象を持つとともに、

「新五は一体、広大な領地をどのように支配していたのか。また、信長馬廻（親衛隊）や息子信忠の配下として各地を転戦する傍ら、城主としてどの程度領内支配に関わっていたのか。」という疑問を抱いた。

そこで本稿では、新五発給文書などの同時代史料を手掛かりに、同人による加治田領支配の一端を探ってみたい。なお、史料的制約及び紙面の都合上、新五の加治田城主初期段階にあたる永禄期に絞って史料紹介と若干の考察を行う。

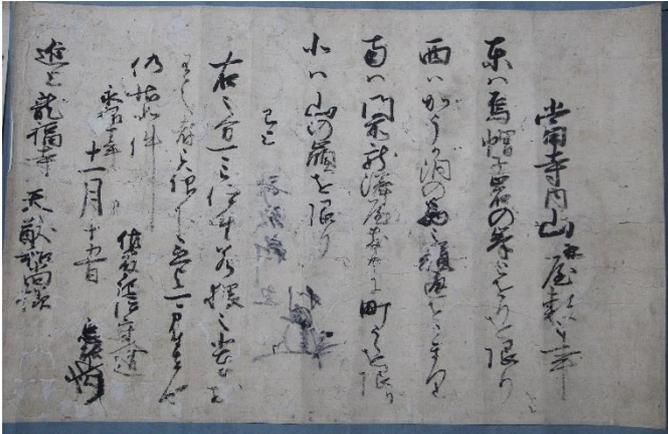


【図1】永禄10（1567）年頃の斎藤新五領（★印）

※島田崇正「斎藤新五利治の実像への思索」（『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第7号』2023年3月）所収の図1を一部加工

2. 新五発給文書及び関連史料の紹介

【史料 1】永禄 10（1567）年 11 月 15 日付け「佐藤忠能寺内山・屋敷安堵状」
（「龍福寺文書」、『富加町史上巻 史料編』61 頁所収）



【画像 1】佐藤紀伊守が龍福寺領を定めた文書



【画像 2】斎藤新五の裏判

【史料 1】は、永禄 10（1567）年 11 月 15 日付けで、佐藤紀伊守入道忠能（以下、佐藤紀伊守と表記）が龍福寺（現：岐阜県加茂郡富加町加治田）領の範囲を示した文書である。そして、【史料 1】で注目すべき点は、「斎藤新五利治（花押）」と記された裏判である。この裏判があることは、加治田城主隠居後も加治田への影響力を持ち続けていた佐藤紀伊守よりも新五が上位の立場、つまり加治田城主であること、そして文書の内容を新五が承認・保証したことを示している。

【史料 1】からは、加治田領内にある寺院（この場合は龍福寺）の寺領範囲について、新五は「裏判」形式で関与していたことが窺える。

【史料 2】永禄 11（1568）年 2 月 21 日付け「斎藤利治掟書写」
（「平井文書」、『岐阜県史 史料編 古代中世補遺』214 頁所収）

棟別門並家役并諸商買役之事
 一 札馬并諸国往還之商売之事
 一 城下自然諸商売停止之儀、雖有之、
 不可有異儀之事
 右之旨令免除者也
 永禄拾壹年
 二月廿一日
 宮内卿殿へ
 利治（花押影）



【画像 3】平井宮内卿（信正）の实在を示す史料（部分拡大）
（平井玖説他天正四年五吟連歌百韻。富加町指定文化財。富加町郷土資料館所蔵）

【提供】富加町教育委員会

【史料2】は、永禄11(1568)年2月21日付けで「宮内卿」(加治田平井家初代信正のこと。1492~1585)(2)に対し、加治田城下での各種特権を与えた文書の写しである。全3箇条からなり、「棟別門並家役」(家屋の棟数毎に臨時に課される税金のこと)及び加治田城下での「諸商売役」(商売に課される税金のこと)の免除、諸国を渡り歩いての商売許可などが記されている。また、差出人が「利治」(現在、【史料2】の原本は所在不明であり花押は実見出来ていないが、新五は永禄8(1565)年11月頃に加治田城主となったこと、同10(1567)年11月15日付けの【史料1】で「斎藤新五利治(花押)」の裏判があることから、「利治」とは新五と同一人物である可能性が高い)となっていることから、【史料2】は新五発給文書の一つと考えられる。

このように、【史料2】は後に加治田村旗本地詰役人・中濃地域有数の豪商へと発展を遂げる加治田平井家に対する諸商売斡旋や諸役免除が中心であり、新五は「本拠地加治田の商業振興にも繋がる文書発給」という形で関わっていた。

【史料3】永禄11(1568)年2月日「制札写」

(「塚原資正家史料」、『新修関市史 通史編 自然・原始・古代・中世』861頁所収)

<p>【読み下し文】※傍線部は筆者で施した</p> <p style="text-align: center;">制札写 定</p> <p>一、<u>当市場前々の如くたるべし</u>、越居の輩、違乱べからざるの事</p> <p>一、新儀の諸役免許せしむ事</p> <p>一、郷質・所質・付沙汰・理不尽使、あるべからざるの事</p> <p>右条々違背の輩においては、速やかに成敗を加うべきの条、件の如し</p> <p>永禄十一年二月日</p>	<p>【解説文】※傍線部は筆者で施した</p> <p style="text-align: center;">制札写 定</p> <p>一、<u>当市場可為如前々</u>、越居之輩不可違乱之事</p> <p>一、新儀之諸役令免許事</p> <p>一、郷質・所質・付沙汰・理不尽使、不可在之事</p> <p>右条々於違背之輩者、速可加成敗之条、如件</p> <p>永禄十一年二月日</p>
--	---

【史料3】は、永禄11(1568)年2月付けで現在の関市市平賀地内に出された制札を近世に写したものである。関市史編さんの過程で発見され、『新修関市史 通史編 自然・原始・古代・中世』に翻刻文が掲載されている(3)。全3箇条からなり、第1条では市平賀にあったとされる「市場」は前々の如くとし、他所から移ってきた者は反対や苦情を申し出ないこと、第2条では「当市場」に対する新規課税の免除、第3条では債務者に対する不法な取り立てや差し押さえを認めないことが記されている。そして、これら条文に背いた者は速やかに処罰するとしている。また、第1条(傍線部)に「当市場前々の如くたるべし」(読み下し文)とあることから、制札が出された永禄11(1568)年2月以前から

同じ場所に「市場」が存在していた。

なお、【史料 3】には宛所と発給者の署名が記されていない（これは、長年屋外に掲示していたことで墨書が薄れ、その部分が読み取れなかったので写さなかったと推測）が、同年段階での市平賀は斎藤新五の所領であることを根拠に、『新修関市史 通史編』では制札発給者を新五と判断している。発給者については、(永禄 8 (1565) 年) 11 月 1 日付け「斎藤新五宛織田信長判物写」に「百貫文 ひらか」と記されているため、筆者も新五説に従いたい。

以上より、【史料 3】は現在の関市市平賀地内にあったとされる「市場」を対象とした制札の写しであり、その発給者は斎藤新五利治と考えられる。また、同史料からは「領内の「市場」保護と商業振興を図るための制札発給」という形で新五も関わっていたことが読み取れる。

3. 新五発給文書などからみた加治田領支配 ～永禄期を中心に～

最後に永禄期における新五の加治田領支配について、本稿では新五発給文書などの「発給年」に着目し、その一端を考えてみたい。

永禄期における新五発給文書などの発給年を改めて整理すると、【史料 1】が永禄 10 (1567) 年 11 月 15 日、【史料 2】が同 11 (1568) 年 2 月 21 日、【史料 3】が同年 2 月となっている。いずれも、織田信長による稲葉山城攻略 (同 10 年 8 月または 9 月) 以降の史料である点が共通している。

『堂洞軍記』などによると、永禄 8 (1565) 年 9 月 28 日の「堂洞合戦」翌日に斎藤方の長井隼人が加治田へ攻め寄せた際、新五の活躍により長井勢を撃退、翌月には長井が立て籠もる関城攻略に新五も加わったとされる。一方、近年では木下聡氏が岡山大学所蔵「武家聞伝記」の中に、同 9 (1566) 年あるいは翌 10 (1567) 年の 3 月 15 日に長井隼人が再び加治田を攻撃した文書の写しが存在することを初めて紹介された(4)。写しではあるものの、同史料の存在によって関城は近世軍記物が示す「堂洞合戦」直後の落城とは断定できなくなった。また、「織田信長の東美濃攻略」(永禄 8 年) によって加治田城を含む東美濃地域は織田領となるが、同 10 (1567) 年 3 月頃までは同城を巡る織田氏と後斎藤氏との攻防が続いた可能性も新たに浮上した。つまり、加治田城主就任直後の新五は同城を巡る後斎藤氏との攻防や西からの備えに専念する状況下であり、領地経営まで十分に行えなかったと考えられる。

以上の点を踏まえると、新五による加治田領支配が本格化するのには、現時点では関城及び稲葉山城攻略により自領を含む美濃国内が安定し始める永禄 10 (1567) 年 9 月以降と考えられる。そして、その根拠の一つとして、【史料 1】～【史料 3】の発給年と各史料の内容 (龍福寺の寺領範囲を定めた文書への「裏判」、本拠地加治田の商業振興にも繋がる文書発給、領内の「市場」保護と商業振興を図るための制札発給) が挙げられる。

< 註 >

(1) 『備藩国臣古証文 四』(東京大学史料編纂所影写本。以下、『備藩 四』と表記)。現在は同所 HP より撮影史料が閲覧でき、本稿ではそれを確認した。最終アクセス日：令和 6 年 3 月 20 日。なお、『備藩 四』では「つほ 上保 中保」とあるが、それよりも後に成立し、岡山藩士斎藤一興が寛政 5 (1793) 年に編纂した『黄薇古簡集 六』

(岡山大学附属図書館所蔵。以下、『黄薇 六』と表記)では「つほ 上保 下保」となっている。『黄薇古簡集』(城府の部の大部分)は配列から注記に至るまで『備藩国臣古証文』と同文であることから、『備藩』を元に編纂した可能性が高いと指摘されている(岡山県地方史研究連絡協議会 1971『黄薇古簡集』解題)。下線部の違いは不明だが、本稿では『黄薇 六』の写し誤りの可能性を考え、図1の地名表記は『備藩 四』の記述を採用した。

- (2) 『富加町史下巻 通史編』(182頁)によると、平井家初代の信正は京の宮内卿で軍術・和歌・連歌・蹴鞠に長けていた。京の戦乱から逃れ縁故のある斎藤道三の元へ身を寄せた。その後、道三と不仲になり山縣郡栗野郷に隠遁中、新五に賓客として招かれ、加治田城下町の東側に位置する「清水口」に居を構えたとされる。
- (3) その後、関市教育委員会発行『ふるさと再発見』(84頁)でも【史料3】が紹介されている(関高等学校地域研究部顧問 林直樹先生のご教示)。また、同書では永禄11(1568)年2月に制札を発給した理由について、「織田信長の東美濃攻略」(同8年)による戦乱で荒廃した市場の機能保証と復興との関わりを挙げている。
- (4) 「3月15日付け野呂孫二郎宛長井隼人佐入道不甘感状写」(木下聡 2020『斎藤氏四代』ミネルヴァ書房、108頁～109頁)。本史料は、「加治田口合戦」(加治田城付近での合戦)で配下の野呂孫二郎が加治田方の山内伝十郎を討ち取ったことを長井隼人が称賛した感状の写しである。発給年は永禄9(1566)年あるいは同10(1567)年と比定されたが、その後、歴史資料集『織田信長の東美濃攻略を考える』(10頁)では、写による月日の誤記があるとしたうえで、永禄9年は斎藤龍興と信長との間で和議が成立していたので、10年の可能性があるとして指摘された。また、本史料から木下氏は「堂洞軍記」にあるように、すぐに関城が落とされたのではなく、加治田を何度か攻めた後に逆襲に遭って、関城を失陥したのではないかと指摘されている。

<参考文献>

- ・岡山県地方史研究連絡協議会 1971『黄薇古簡集』(岡山県地方史資料叢書8)
- ・木下聡 2020『斎藤氏四代』(ミネルヴァ書房)
- ・同 2021「後斎藤氏と織田氏との美濃国攻防史」(歴史資料集『織田信長の東美濃攻略を考える』美濃加茂市・坂祝町・富加町、5頁～14頁)
- ・島田崇正 2023「斎藤新五利治の実像への思索」(『岐阜県立関高等学校地域研究部報告第7号』関高等学校地域研究部、14頁～15頁)
- ・関市 1996『新修関市史 通史編 自然・原始・古代・中世』
- ・関市教育委員会 2002『ふるさと再発見』
- ・富加町 1980『富加町史下巻 通史編』
- ・山内正明 2023「文献史料等に見る加治田城主斎藤新五利治」(『岐阜県立関高等学校地域研究部報告第7号』関高等学校地域研究部、16頁～21頁)

津保城に関するメモ、5題

関高等学校 地域研究部顧問 林 直樹

津保城やその関連遺跡、周囲の地形や集落をめぐり、図書館で関連する文献を調べるうちに、興味深い史料や伝承、地名に出会った。以下にそのいくつかを紹介する。

メモその1 山城の城名

大洞城には一柳城や津保城の別名がある。どの名が学術名にふさわしいか検討してみた。まず、『濃陽志略』（1757）、『濃州徇行記』（天明年間）、『新撰美濃志』（1844）等の江戸期の地誌を調べてみたところ、意外なことに城名の記載はない。古城とあるだけだった。

『上之保村誌』（1938）によれば、大洞城の初見は「宇佐見氏系図」、一柳城の初見は「満願寺由緒沿革記」のようである。これに対し、「津保城」や「津保・梶田（加治田）領主斎藤新五」の用例は、それぞれ「勝興寺宛浅井長政書状」や郡上藩家伝（「遠藤記」「慶隆御一世聞書」）に登場する。このほか、『美濃古城史』（梅田晋一 1893）にも津保城の名が登場するが、何を典拠としたかは不明である。

現状、伝承由来の大洞城の呼称が論文等を通じ広まっているが、より信頼性の高い史料に登場する津保城の方が学術名にはふさわしいと考える。

メモその2 宇佐見氏の伝承 ～大洞城は宇佐見氏の城館か～

『富之保村誌』（1925）には、大洞城の城名は津保川右岸（一柳集落）の山城をさした呼称ではなく、対岸（大洞集落）にあった城館の呼称であったとの見解が述べられている。

大洞城と一柳城、世人は同一のものなりと信ずれども、これ大なる誤りなり。大洞城は現今の丹波屋敷にありしものにして、宇佐見左右衛門尉の在城せしと伝ふ。然れども何時頃の者なるか詳かならず。『船田後記』に、「明応五年六月二十日、土岐元頼戦死し隨死者三十余人」とある中に、宇佐見丹波前司同弟与三右衛門尉とあり。蓋しこの与三右衛門尉なるもの、宇佐見左右衛門尉なるべし。現今榎の大木存す。（『富之保村誌』1925より引用）

左岸の大洞には、土岐氏家臣の宇佐見氏屋敷跡（大洞城）の伝承地があり、丹波屋敷の地名が残る。「宇佐見氏系図」によれば、宇佐見丹波守弘房が大洞城を構え津保を支配したという。『上之保村誌』（1938）の指摘通り、『船田乱記』の宇佐見丹波前司は、その生没年（1496）から考えて、「宇佐見氏系図」の弘房と同一人物と見るのが穏当であろう。

天文年間の大桑城落城に際し、宇佐見左衛門尉は、主君土岐頼芸とともに揖斐郡に落ち延びたと伝えられる（『美濃国諸旧記』ほか）。「先谷八幡神社社記」には、天文12（1543）年、宇佐見左衛門尉が大般若経六百巻を神社に寄進したとあり、「宇佐見氏系図」には丹波守子息の休左衛門による大般若経寄進の記録が記されているという（『上之保村誌』）。

『富之保村誌』は、左衛門尉を丹波守の第三右衛門尉と同一人物とみなすが、三右衛門尉は兄とともに明応5年に戦死しているため、天文年間に活躍する左衛門尉とは別人物であろう。以上に見た通り、宇佐見氏の津保統治に関しては、断片的な史料が多い。津保城の問題も含め、その解明は今後の課題である。

メモその3 津保城と一柳氏

羽柴秀吉が覇権を握ると、黄母衣衆の一柳直末が大垣城主、ついで軽海西城主となり西濃一帯の美濃国蔵入地代官を兼ねた。蔵入地とは秀吉の直轄領をさす。一柳氏による津保城や武儀郡蔵入地の支配を示す直接の史料はないが、武儀郡統治に関わったことを示す書

状が2通存在する（『関市史史料編 古代・中世・近世 1』1995）。このうち1通は、天正18（1590）年、一柳直政が洲原神社に宛てた寄進・課役免除の書状であり、もう1通は、同年、一柳可遊が関町の長谷川五郎兵衛宛に納税確約を命じた書状である。系図によれば可遊（右近・直秀）は直末の従兄弟にあたる。直政の名は系図にないが、軽海西城の所在地、本巢郡真桑村・早野村で土地相論の裁きを行った書状2通が残されているので、直政が直末一門であり、徴税や裁判を行う立場にあったことがわかる（『真正町史史料編』1971）。

『上之保村誌』は直政を直末実弟の直盛とみなす。直盛の前名は光政と伝わる。同一人物の可能性は高い。この年3月、直末は、小田原出兵に従軍し箱根坂の戦いで戦死した。兄に代わり陣頭指揮した直盛は、戦功により尾張黒田3万石を与えられた（『一柳監物武功記』1935）。直盛の移封をもって一柳氏の武儀郡支配は終了したのであろう。天正18（1590）年以降、文禄3（1594）年まで、武儀郡蔵入地代官には、古田重勝が任じられている（『岐阜県史通史編 近世上』1968）。それ以前の代官は不明だが、一柳氏が任にあたっていたと考えると、史料や伝承を整合的に解釈できそうである。

なお、地元には、直盛移封を惜しんだ村人が、一柳の名を拝領し地名に冠したとの伝承が残る。「ひとつやなぎ」ではなく「いちやなぎ」と読み、字名や城名は伝承とともに語り継がれ今にいたる。

周囲に残る地名にも言及しておく。津保城は、津保川とその支流、武儀倉川の合流点北側の山塊に所在する。武儀倉川一帯の字名は武儀倉であり、河川合流点付近には倉崎の小字も残る。武儀倉及び倉崎は「武儀郡蔵入地」に由来する地名ではないだろうか。

メモその4 津保城下にもあった市神の榎

<岐阜市の市神> 『岐阜記』（1738）によれば、岐阜町の南に美菌の市、西に中河原（川原町）の市、北に岩倉の市があり、それぞれに市神の宿る榎があったという（『岐阜市史』1928）。有名な美菌の榎は、2022年、倒木の可能性が生じたため伐採された（右上写真）。中河原の榎は、天文年間の洪水で流されたと言われるが、元浜町には今も大きな榎が所在する（右中写真）。この榎の由来は不明である。

岩倉の榎は、昭和初期まで、岩倉一神宮（いわくらいちがみのみや）の境内にあった（『ぎふ早田郷土誌』1970）。一神はすなわち市神である。1936年の河川改修に伴い、岩倉一神宮は同じ町内の津島神社境内に遷座した（右下写真）。『ぎふ早田郷土誌』に榎の行方は書かれていないが、工事に伴い姿を消したと考えられる。

<美濃市上有知の市神> 『上有知旧事記』には、美濃市の古い町並み（うだつの町並み）の中に、榎市神と六地藏市神が移転され祀られたとの記載がある。おそらくは古市場（現在の西市場町及び東市場町、中世の市場跡）から、うだつの町並みの一番町上と二番町中のそれぞれに移されたものであろう。現在、町並みを見渡しても、榎も六地藏もみあたらない。「武儀郡上有知村絵図」（1792）によれば、元々は西市場町あたりを「古市場」と呼称したようである。市神の榎も、元来この西市場にあったのではないか。六地藏の本来の所在地は不明である。東市場町では榎を植えず、路傍の六地藏を市神に見立てて祀ったのかも知れない。

<関市市平賀の市神> 『関市史』編纂に伴う調査により、永禄11（1568）年の制札写が



発見され、関市内市平賀に樂市が所在したことが判明した。市場の存在を示す榎の巨木も近年まで残されていたが、駐車場工事のため2013年春までに伐採された。かつての姿は『関市史通史編 自然・原始・古代・中世』（1996）の写真で偲ぶしかない（右上写真）。

<津保城下の市神> 『富之保村誌』には、「大洞の榎」と題した榎の巨木の写真が掲載されている（右下写真）。注連縄がめぐらされており、この木を切る者は命を失うと言われたという（『武儀の語り草第4集』1992）。榎は終戦の頃に枯死したため現存しない。

榎の所在地は、津保城対岸の大洞集落で、宇佐見氏の居館伝承地である。前述の通り、この伝承地には丹波屋敷の地名が残るが、別名榎屋敷とも言われていた。神聖視されたこの榎の巨木は、市神の宿る木だったと思われる。かつての領主居館跡の空闲地が市場に転用され、市神の榎が植樹されたのではないだろうか。

メモその5 城下町と街道

最後に、城下町から延びる東西南北の街道について触れておく。

- ① 河川合流点から武儀倉川に沿って北上すれば、馬越峠を越えて郡上市美並にいたる。
- ② 城下町から北上し放生峠を越すと、下呂市祖師野や沓部、郡上市和良にいたる。
- ③ 大洞のすぐ南には川湊跡、津保城下町（町集落）があり、さらに南の栗野集落から東に向かって進み、ふたつの峠道（御館野坂・北条坂）を越すと七宗町神淵にいたる。神淵から袋坂を越せば、下呂市菅田を通じて飛騨にいたる。
- ④ 栗野の対岸の水成から西に峠を越すと美濃市上河和に通じる。（踏査の様子、下写真）
- ⑤ 栗野から南下すれば、伊深・加治田方面や、吉田町・関町方面にいたる。

津保城近辺は山あいの静かな集落であるが、かつては各方面への街道を結ぶ交通の要衝であった。榎の下で開かれた樂市や川湊付近は商いでにぎわったに違いない。当時の市場は月6日開かれる六斎市であり、その名称は殺生を戒める六斎日に由来する。市平賀の例にあるように、加治田領内でも、城下に限らず各所で市場が開かれていたと考えられる。

城下町と各地の商業地をつなぐ峠の地名、放生峠（津保～沓部・金山）、北条坂（津保～神淵・菅田）は、どちらも「ほうじょう」と読む。仏事の放生会にちなむのだろう。放生会も六斎日に同じく殺生禁断と関わる習俗である。「ほうじょう」の地名由来は不詳だが、旅の安穏や道普請の無事などが願われたのではないかと想像する。

『上之保村誌』や『富之保村誌』には、集落間を結ぶ山道の話がいくつも登場する。近代以前の山道は、人の通う歩荷（ぼっか）道か、もしくは馬の通う荷駄道であった。険しい山道では荷駄を下ろし、人が背負うこともあったという。車道の開削は明治以降である。

天正6（1578）年10月、信長の命を受けた新五は越中に侵攻し、月岡野の戦いで上杉勢を破った。この時、新五が率いたのは美濃・尾張の兵である（『信長公記』）。織田勢は、加治田と津保を拠点に、北に向かう幾筋かの山道を通り、越中をめざしたと考えられる。

近年の風水害、過疎化や林業の衰退で、地域の生活道路であった山道の多くは忘れ去られ、廃道となりつつある。機会をみつけてまた歩いてみたい。



後記

『岐阜県立関高等学校地域研究部研究報告 第9号』は、「東美濃三カ所城」の特集号である。

加治田、津保、鉦尾山、東美濃三カ所城とその支城は、元亀年間から天正初年にかけて、織田領国の北辺を守る要の城であった。東美濃の北方に広がる飛騨や郡上の地には、武田や上杉の勢力が及んでおり、その双方との良好な関係を望む織田信長にとっては、いたずらに介入することがはばかれる「緩衝地帯」でもあった。

三カ所城のうち、鉦尾山城は齋藤秀方、津保城と加治田城は、齋藤新五の城である。東美濃のふたりの武将は、三カ所城を拠点に織田領国北辺を警護しつつ、同時に、信長父子に従って畿内・近江を転戦するという厳しい役どころを担った。

巻頭のレポートは、東美濃各地の山城や城下町を踏査し、文献調査を行った部員が、学びの過程をまとめたものである。6名の生徒は全員美濃市出身。鉦尾山城の所在する古城山は、地元小中学校の校歌にも登場する有名な山であるが、山名の由来や戦国史をめぐっての動向についてはほとんど知らなかったという。また、有名な「うだつの町並み」が整備される以前、長良川べりの水田地帯に、戦国期の城下町（古町）が形成されていたことも、大きな驚きだったようである。

各地の伝承地や寺社、城跡を訪ね、地名や言い伝えの聞き取りを行う彼らの活動には、今後も注目したい。

続く島田崇正氏の「加治田の領域と街道」は、今回の研究テーマを歴史地理的な観点から俯瞰した論考である。フィールドワークの成果が随所にちりばめられているので、同行した部員にとっても、興味深い内容であろう。

「関市大洞城の構造にかかる若干の考察」と題した森島一貴氏の論考は、考古学的に見た津保城（大洞城）の現状をまとめたものである。今年の5月12日、森島氏からの提案で、津保城の現地セミナー・シンポジウムを開催することになった。現在、「案内役」「発表者」を務める部員は、緊張しつつその準備をすすめているところである。

山内正明氏は、「齋藤新五利治発給文書などからみた加治田領支配（その1）」と題をまとめ、関連文書の分析を通じ、加治田齋藤氏の領国支配を論じている。ここ数年、齋藤新五に関わる文献資料の「発見」「再発見」が続いている。（その2）に期待したい。

平素より部員の歴史探究を支えていただいているお三方には、今回も玉稿を賜った。記して感謝申し上げます。

末尾に付した「津保城に関するメモ、5題」は拙稿である。実家の庭先から見え、子どものころから幾度も登った「一柳のお城」に、ドラマチックな歴史がひそんでいようとは夢にも思わなかった。部活動の思わぬ余得である。

（地域研究部顧問 林 直樹）

岐阜県立関高等学校地域研究部報告

第 9 号

発行：令和 6 年 4 月 10 日

発行所：岐阜県立関高等学校

岐阜県関市桜ヶ丘 2-1-1

電話 0575-22-5688

FAX 0575-23-7089

岐阜県立関高等学校地域研究部